

令和元年度 学校保健統計健康状態調査

調査結果の概要

- ・身長、体重とも全国平均を下回る傾向であり小柄である。また、痩身傾向である。
- ・中学1年生（12歳）のDMF T指数（一人当たりの永久歯のむし歯等数）は、0.44本で、全国平均の0.70本を下回っているが、昨年度から0.01本増加している。また、高校1年生のDMF T指数は1.11本であり、昨年度から0.10本増加している。
- ・歯肉の状態においては、中学校で全国平均を下回る好結果である。
- ・食物アレルギーを有する者の割合は、増加傾向である。
- ・脊柱、胸郭の異常割合は、全国平均を上回る傾向であり、特に高等学校の割合が高い。

1 調査の目的

幼児、児童及び生徒（以下「児童等」という）の発育及び健康状態を明らかにすることを目的とする。

学校保健安全法施行規則により4月1日から6月30日に実施される健康診断の結果に基づき、健康状態調査を実施する。

2 調査の対象

本調査の対象者は、文部科学省の学校保健統計に準ずるものとする。

（発育状態調査）

令和元年度学校保健統計調査（文部科学省）岐阜県調査実施校の抽出調査結果

（健康状態調査）

岐阜県公立小学校、中学校、義務教育学校、高等学校及び幼稚園に在籍する満5歳から17歳までの児童等在学者全員を対象

校種	学校総数	在学者数	参加校数	対象者数
	(校)	(人)	(校)	(人)
幼稚園(5歳)	69	3,898	45	1,328
小学校	369	105,375	369	105,284
中学校	178	53,430	178	53,300
高等学校	66	42,840	66	42,497
総数	682	205,543	658	202,409

※義務教育学校は、前期課程は小学校、後期課程は中学校のデータを含む。(以下 同様)

※幼稚園のデータは、調査対象者数が少ないため、数値の高低に影響を受けやすい。

3 調査項目

本調査の項目は、文部科学省の学校保健統計調査項目に準ずるものとする。本県独自の項目として「食物アレルギー」「1型糖尿病」「2型糖尿病」「腎性糖尿」「学校生活管理指導表（アレルギー疾患用）の活用者数」を追加している。

(1) 発育状態

○身長・体重とも全国平均を下回る傾向

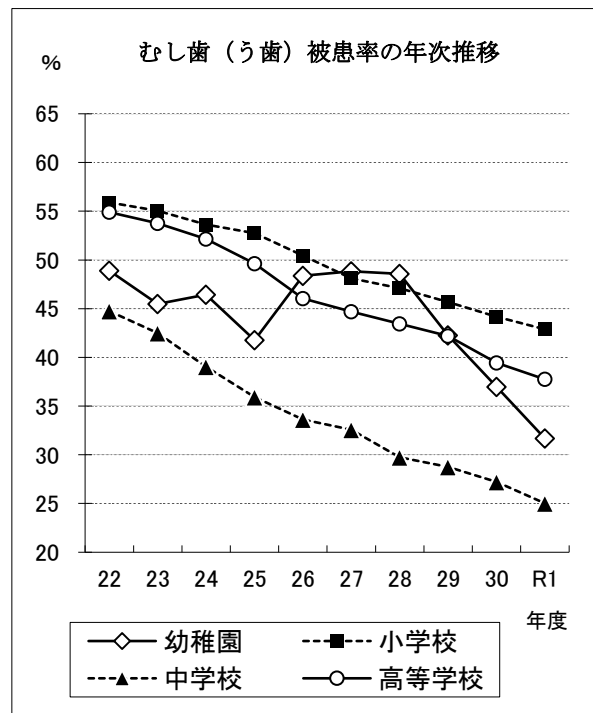
令和元年度の児童等の身長・体重について、身長は男子が5、10、17歳、女子が7、13歳で全国平均を上回ったが、それ以外の年齢では全国平均と同じか下回った。体重は女子が8、13歳で全国平均を上回ったが、男子の全年齢と女子のそれ以外の年齢では全国平均と同じか下回った。

(学校保健統計調査速報 岐阜県HPより)

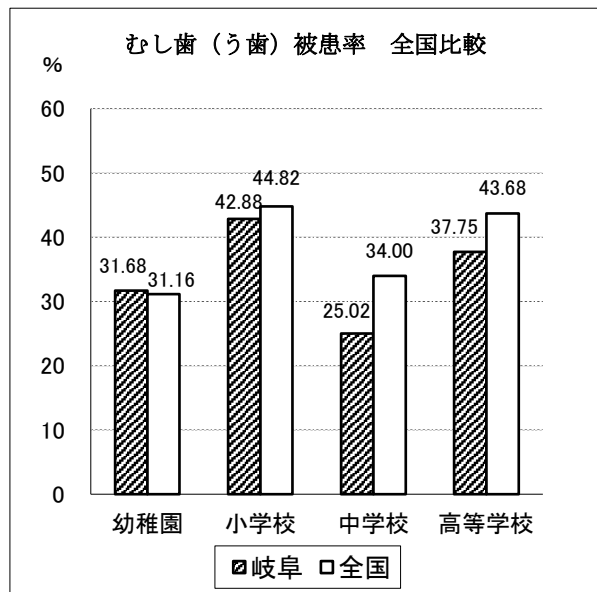
(2) むし歯(う歯)

○むし歯はさらに減少傾向

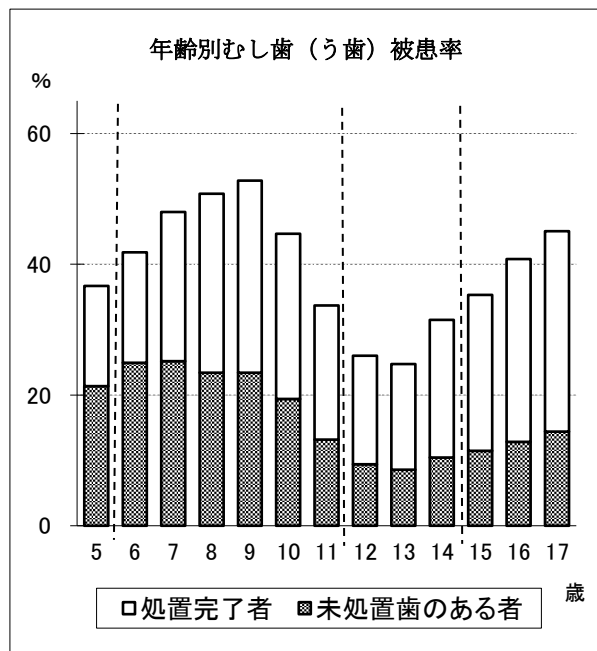
むし歯被患率は、幼稚園31.68%、小学校で42.88%、中学校で25.02%、高等学校37.75%となり全校種で昨年度より減少した。



むし歯被患率を全国と比較すると、小学校、中学校、高等学校において下回り好結果であった。特に、中学校では8.98ポイント低かった。なお、幼稚園が昨年度と同様に全国を上回った。

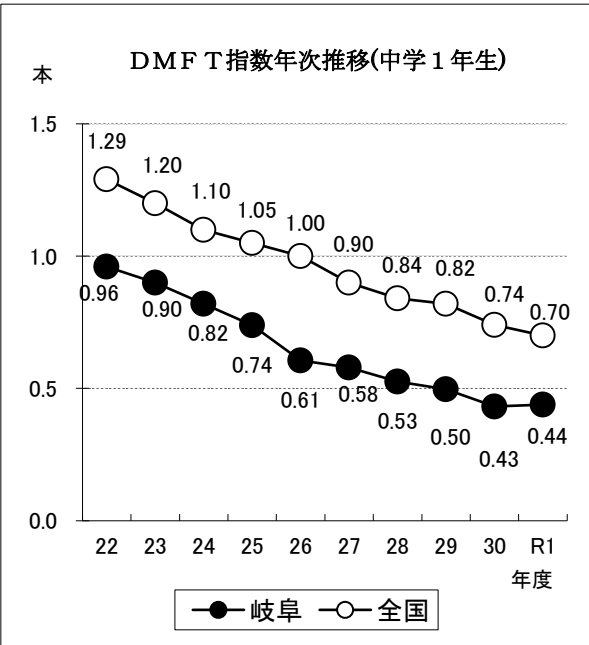


むし歯被患者の内、未処置歯のある者は、5~9歳に多く、その後は減少するが、14歳から僅かに増加している。これは、例年と同じ傾向であった。むし歯被患率が10~12歳において割合が減少するのは、乳歯が生え替わることによると考えられるため、14歳以降の永久歯のむし歯を増加させないよう、幼少期からの教育及び家庭との連携が重要である。

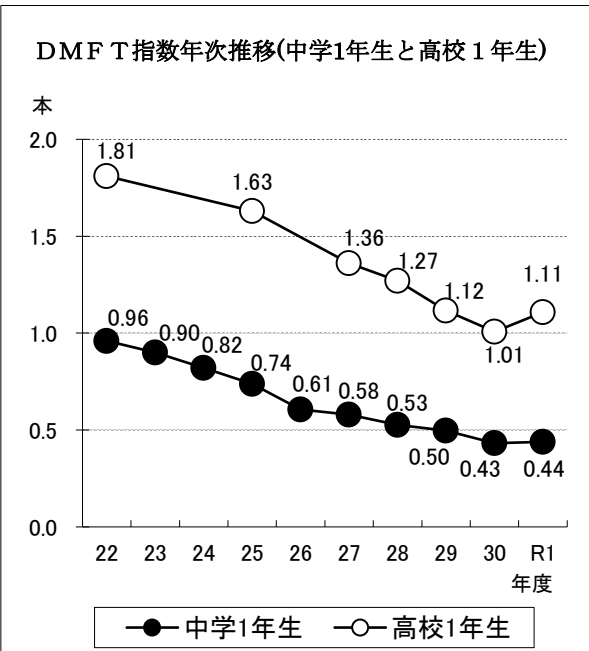


DMF T指数 (一人当たりの永久歯のむし歯等数)
 D: 永久歯のむし歯で未処置の歯
 M: 永久歯のむし歯が原因で失った歯
 F: 永久歯のむし歯で処置を完了した歯

中学1年生のDMF T指数を全国と比較すると、0.26本下回り好結果であった。



DMF T指数を昨年度と比較すると、中学1年生(12歳)は0.01本増加し0.44本、高等学校1年生(15歳)は、昨年度から0.10本増加し1.11本であった。

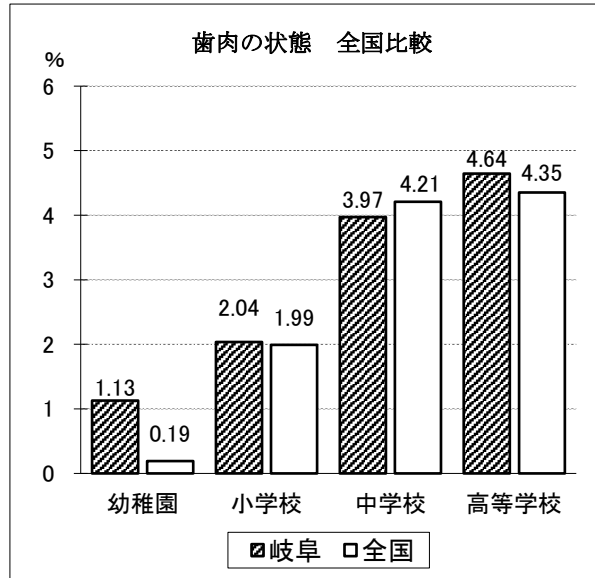


(3) 歯肉の状態

○歯肉の状態が中学校で全国を下回る

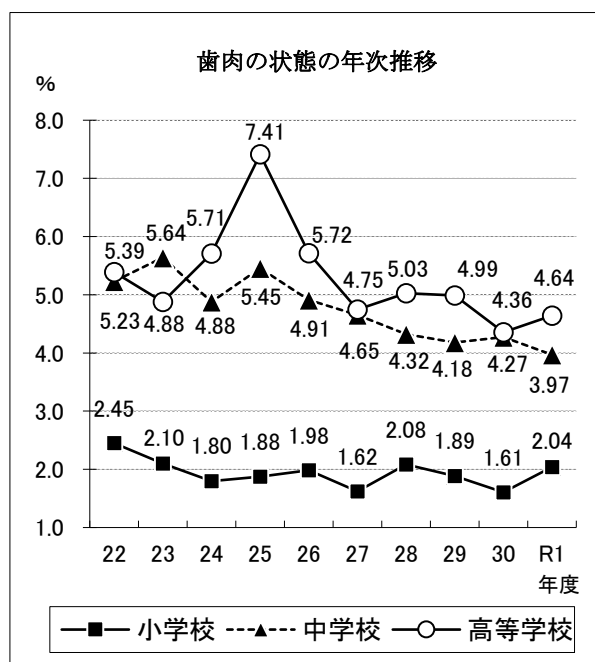
歯肉の状態：歯肉に炎症があり、歯肉の状態が「2」（専門医による診断が必要）と判定された者

歯肉の状態の割合を全国平均と比較すると、中学校において下回り好結果であった。



歯肉の状態を昨年度と比較すると、中学校において減少した。小学校、高等学校においては昨年度から増加した。

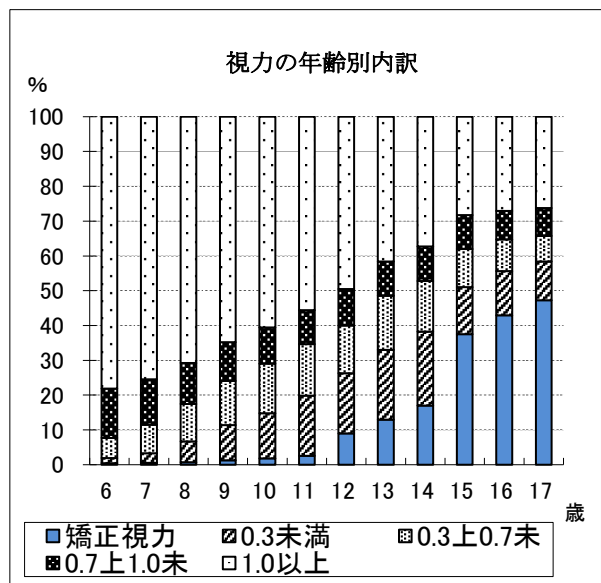
歯科検診では、学校歯科医と連携し、比較的軽度の歯肉炎であっても予防のため「2」（要受診）と判定している学校も多いことが被患率を上げている要因の一つではある。



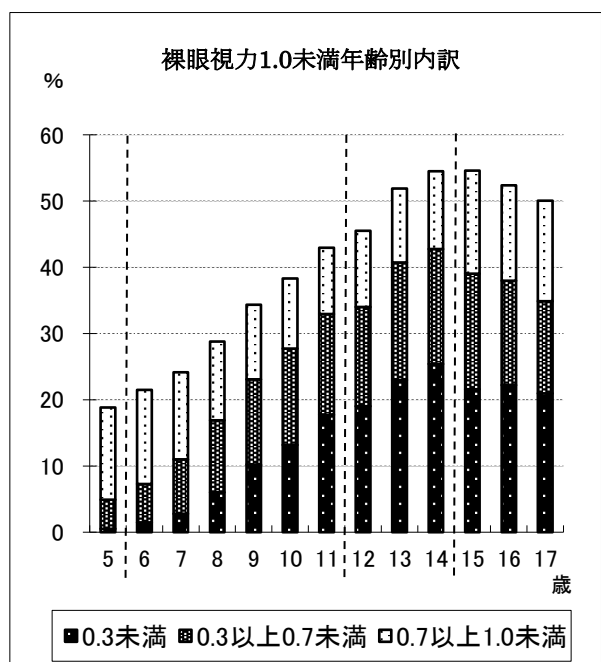
(4) 裸眼視力

コンタクトレンズの使用などにより裸眼視力を測定していない者が増加しているため、平成27年度より「眼鏡やコンタクトレンズで視力矯正をしているため裸眼視力を測定できず、矯正視力のみ測定した者」の数も調査し、それを含めた視力の割合を算出した。裸眼視力1.0未満の者の割合は、年齢が進むにつれて着実に増加している。

視力低下については、スマートフォン等の普及により近くを見る機会が増え、長時間利用していることが視力低下の一因ともいわれている。



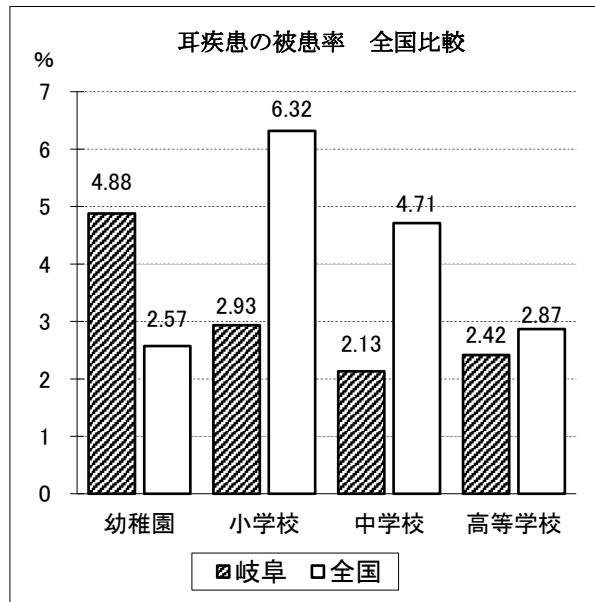
なお、裸眼視力年齢別では1.0未満の者が15歳で最も多かった。



(5) 耳疾患・鼻・副鼻腔疾患

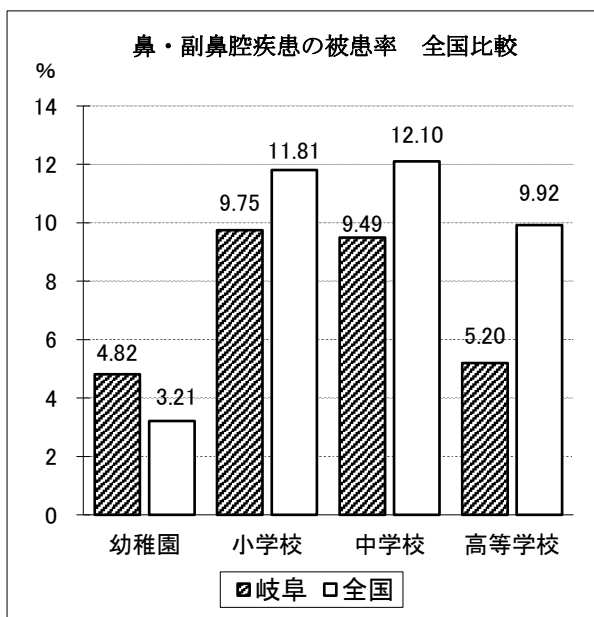
耳疾患・・・急性・慢性中耳炎、内耳炎、外耳炎、メニエール病、耳垢栓塞等の疾患・異常と判定された者

耳疾患の被患率を全国と比較すると、小学校、中学校、高等学校では大きく下回り好結果であった。一方で、幼稚園は昨年度と同様に上回った。



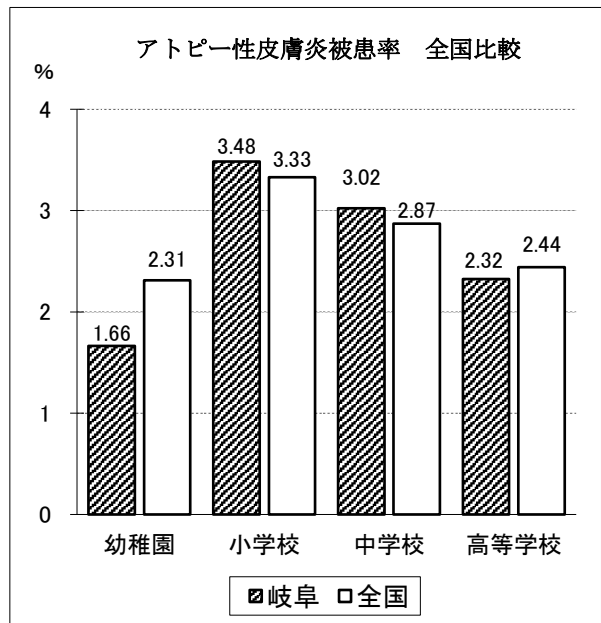
鼻・副鼻腔疾患・・・慢性副鼻腔炎、慢性鼻炎、鼻ポリープ、鼻中隔彎曲、アレルギー性鼻炎の疾患・異常と判定された者

鼻・副鼻腔疾患の被患率を全国平均と比較すると、小学校、中学校、高等学校で下回り好結果だった。一方で、幼稚園は昨年度と同様に上回った。

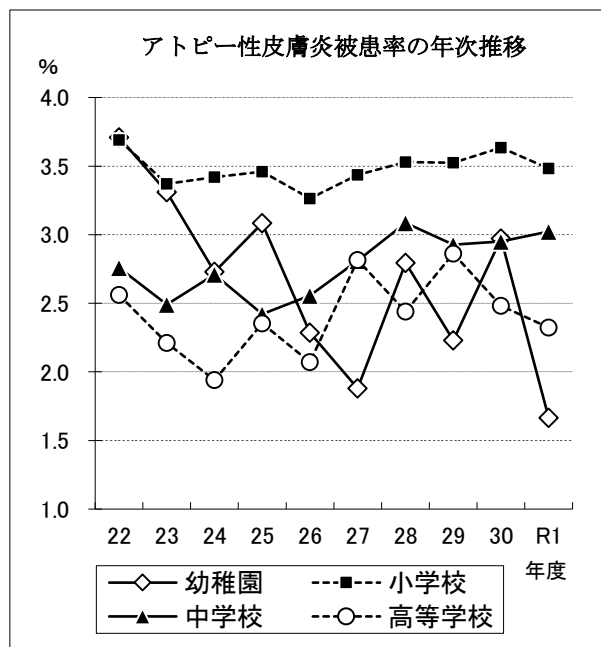


(6) アトピー性皮膚炎

アトピー性皮膚炎被患率を全国と比較すると、幼稚園、高等学校で下回り好結果であった。

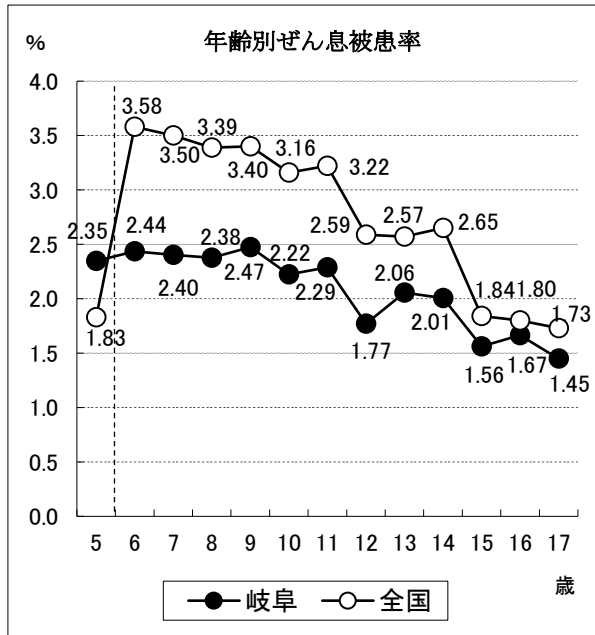


アトピー性皮膚炎被患率を昨年度と比較すると、幼稚園において、昨年度を大きく下回り好結果であった。校種別では、小学校の被患率が高い傾向である。

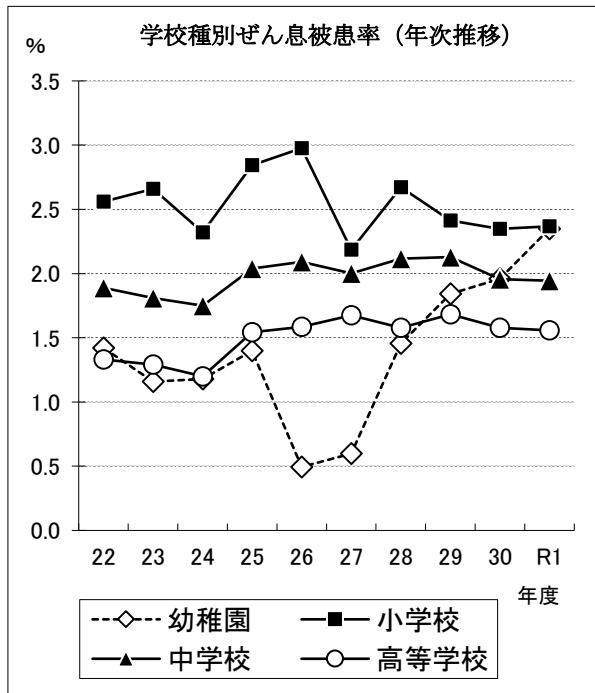


(7) ぜん息

昭和42年度以降、岐阜県の年齢別ぜん息被患率は、全国平均に比べ、6歳児以降で低い傾向が続いている。



学校種別ぜん息被患率を昨年度と比較すると、小学校、中学校、高等学校で大きな変化は見られない。幼稚園については、平成26年度に大きく減少したが、平成28年度以降増加傾向である。

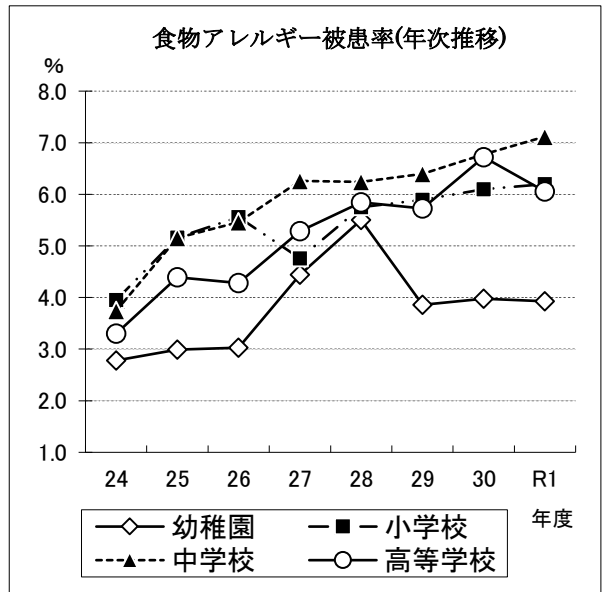


(8) 食物アレルギー

○食物アレルギー被患率は小学校、中学校において増加傾向

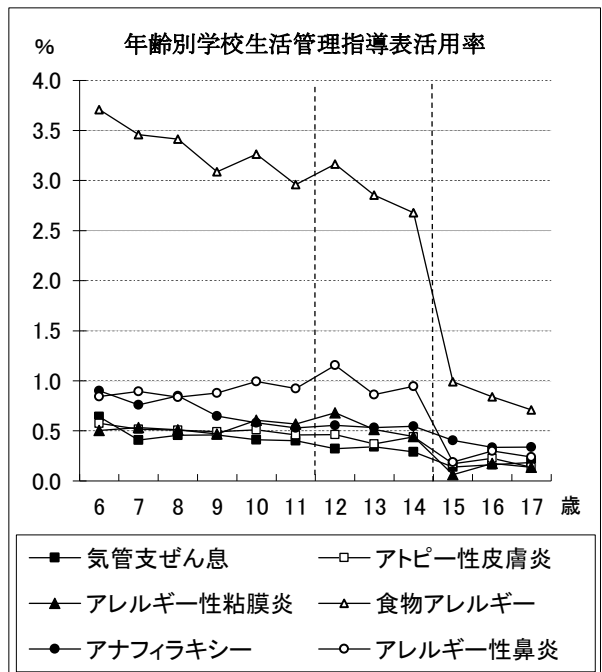
食物アレルギーの者：入学時、または健康診断前の保健調査等で食物アレルギーと確認された者

食物アレルギーを有する児童等の被患率を昨年度と比較すると、小学校、中学校において増加した。



○学校生活管理指導表活用は「食物アレルギー」が多い

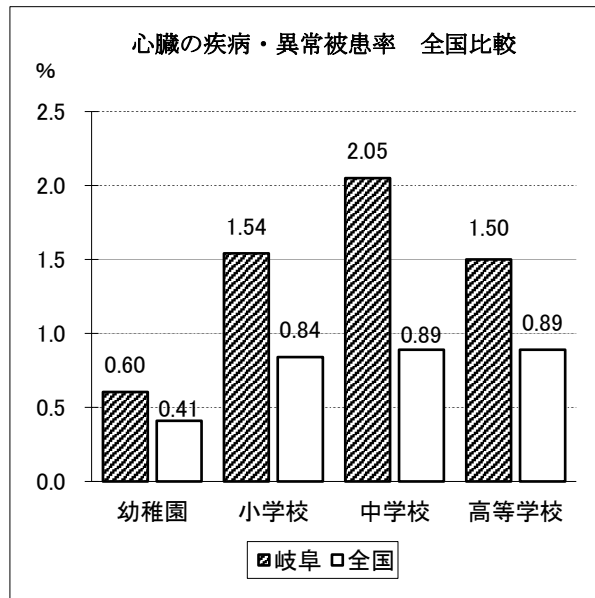
学校生活管理指導表活用率は「食物アレルギー」が、他のアレルギー疾患に比べて高い。また、年齢が上がるにつれ、活用率が下がっている。



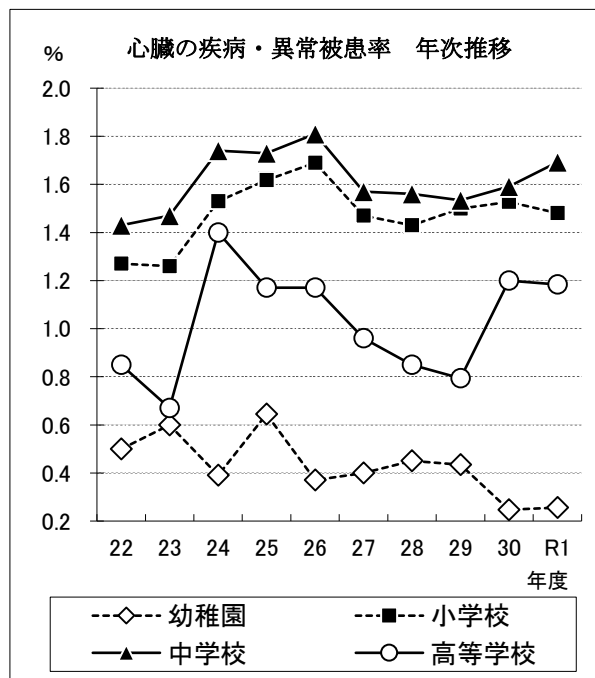
(9) 心臓疾患・心電図異常

心臓疾患・・・心膜炎、心包炎、心内膜炎、弁膜症、狭心症、心臓肥大、その他の心臓の疾病・異常の者（心音不順、心雑音及び心電図異常のみの者は含まない。）

心臓の疾病・異常被患率を全国と比較すると、全校種で大きく上回った。

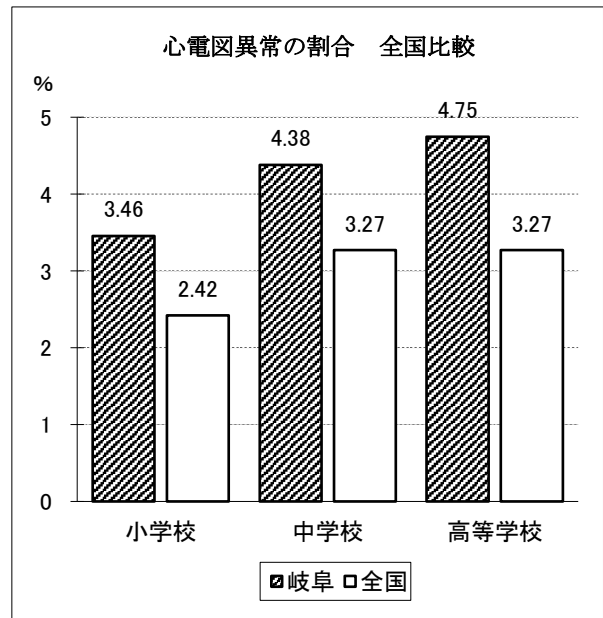


心臓の疾病・異常被患率を昨年度と比較すると、小学校、高等学校において減少した。校種別に比較すると中学校の被患率が高い傾向である。

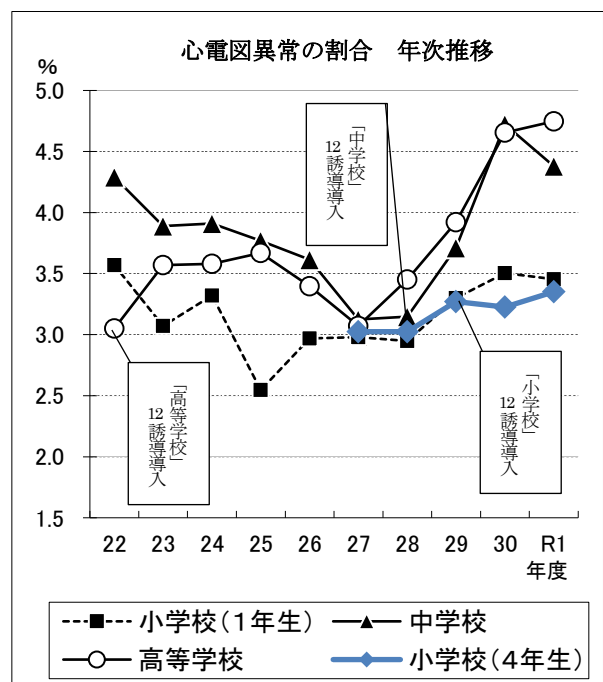


心電図異常・・・心電図検査の結果、異常と判定された者。ここでいう異常とは医師が心電図所見を見て異常と判断した者を指す（一次検診）

心電図異常の割合を全国と比較すると、全校種で上回った。



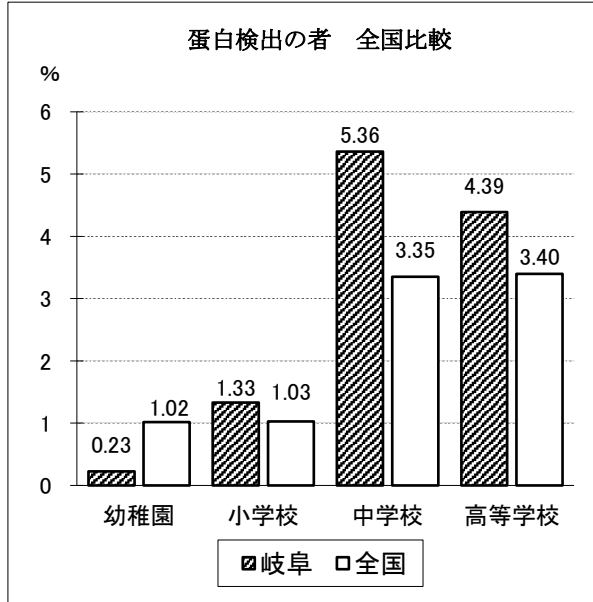
心電図異常の割合を昨年度と比較すると、小学校1年生、中学校において減少した。校種別では、近年高等学校の被患率が高い傾向である。



(10) 腎臓疾患

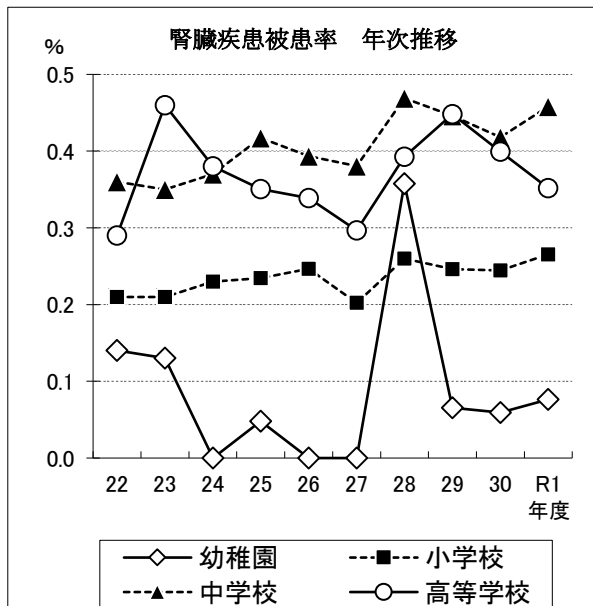
蛋白検出者・・・第一次検査の結果、尿中に蛋白が検出（陽性または疑陽性と判定）された者

蛋白検出の者の割合を全国平均と比較すると、小学校、中学校、高等学校において上回った。



腎臓疾患・・・急性及び慢性腎炎、ネフローゼと判定された者

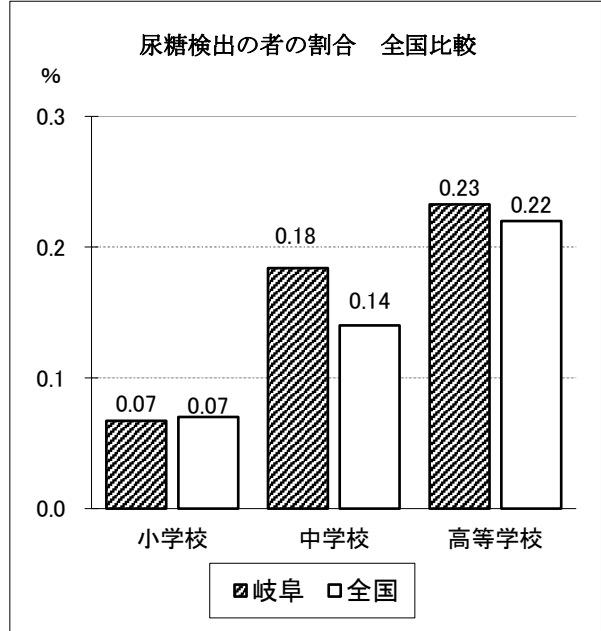
腎臓疾患被患率を昨年度と比較すると、高等学校において減少した。



(11) 糖尿病

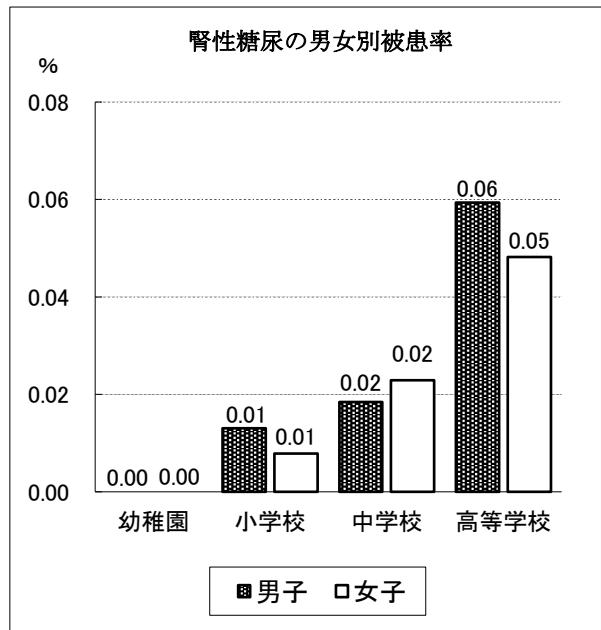
尿糖検出者・・・第一次検査の結果、尿中に糖が検出（陽性と判定）された者

尿糖検出者の割合を全国と比較すると、中学校、高等学校で上回った。



腎性糖尿・・・腎性糖尿と判定された者

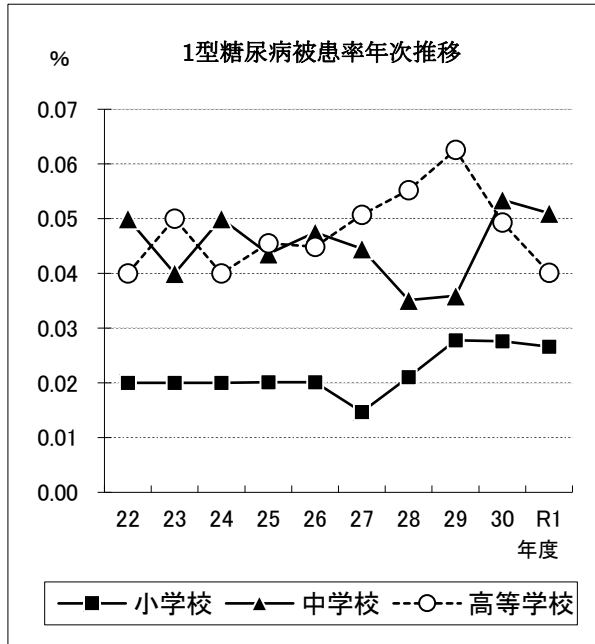
腎性糖尿は、高等学校の男子がやや高い。



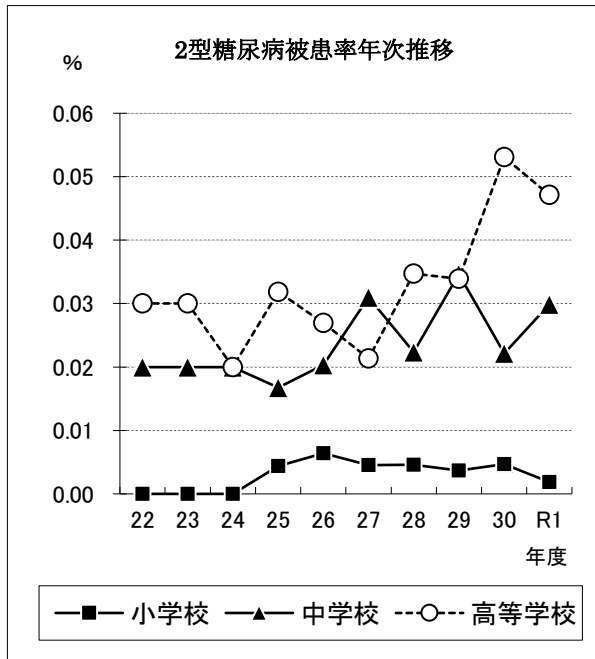
1型糖尿病・・・膵臓のインスリンを生産している細胞が破壊され、インスリン分泌が著しく低下しておこる病気

2型糖尿病・・・2型糖尿病になりやすい素因を持っている子供が、運動不足、過剰な食事やストレスが多い生活を続けていると発症しやすい病気

1型糖尿病の被患率を昨年度と比較すると、全校種において下回った。



2型糖尿病の被患率を昨年度と比較すると、小学校、高等学校において下回った。

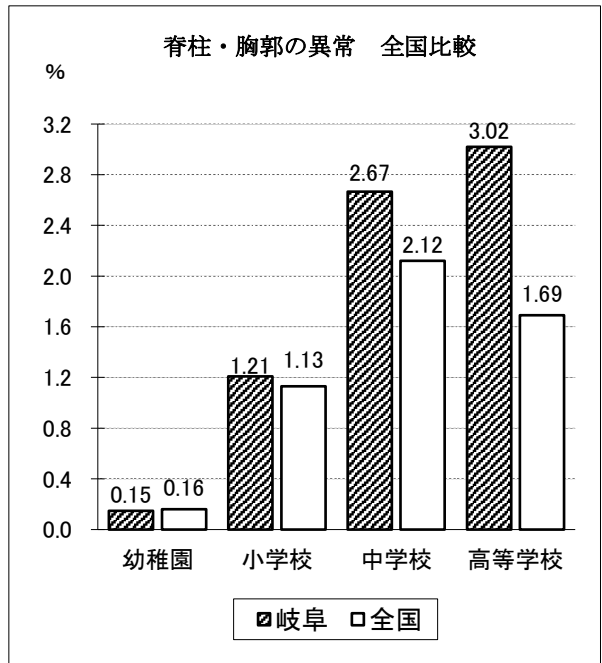


(12) 脊柱・胸郭・四肢の状態の異常 ○脊柱・胸郭の異常割合は全国を上回る傾向

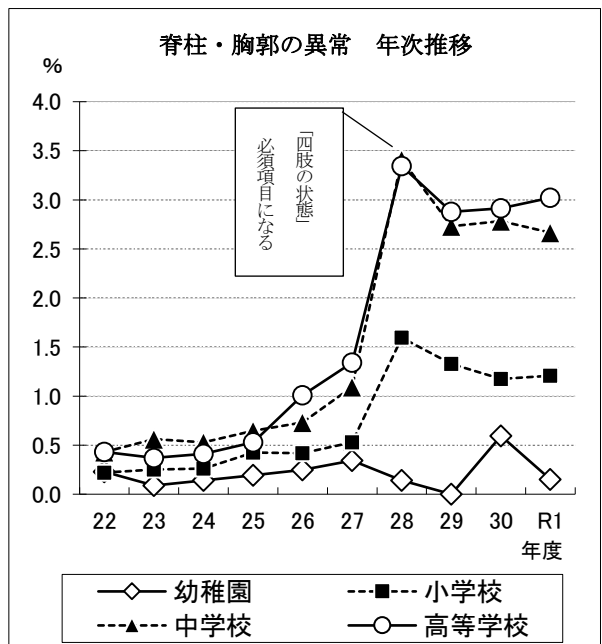
脊柱・胸郭・・・脊柱、胸郭及び四肢の状態が異常と判定された者
四肢の状態

平成28年度より健康診断の項目「四肢の状態」が必須項目に加わり運動器検診が実施されている。

脊柱・胸郭の異常を全国と比較すると、小学校、中学校、高等学校で上回った。特に高等学校の割合が高い。

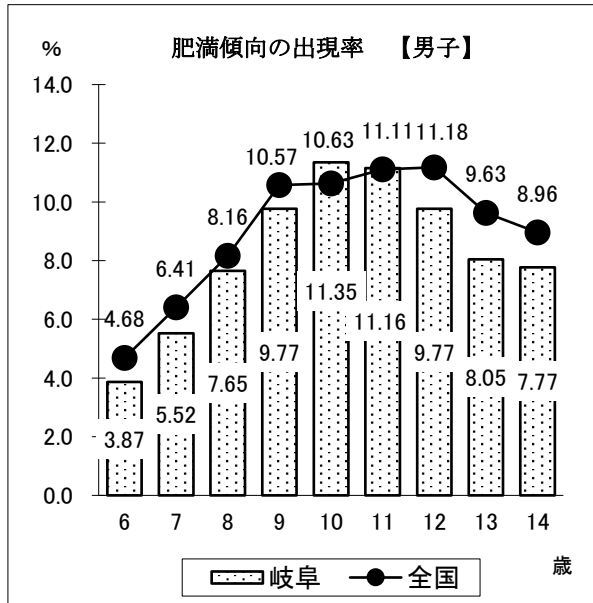


脊柱・胸郭の異常を昨年度と比較すると、幼稚園、中学校において下回った。



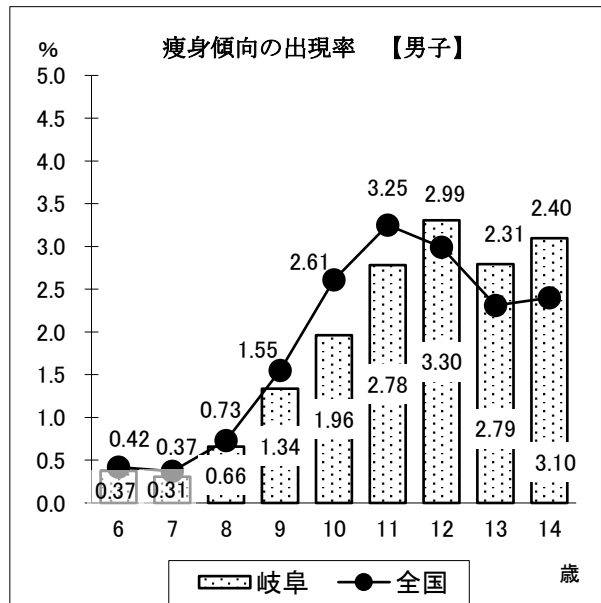
(13) 肥満傾向

肥満傾向の出現率を全国と比較すると、男子の10・11歳を除くその他の年齢で下回った。

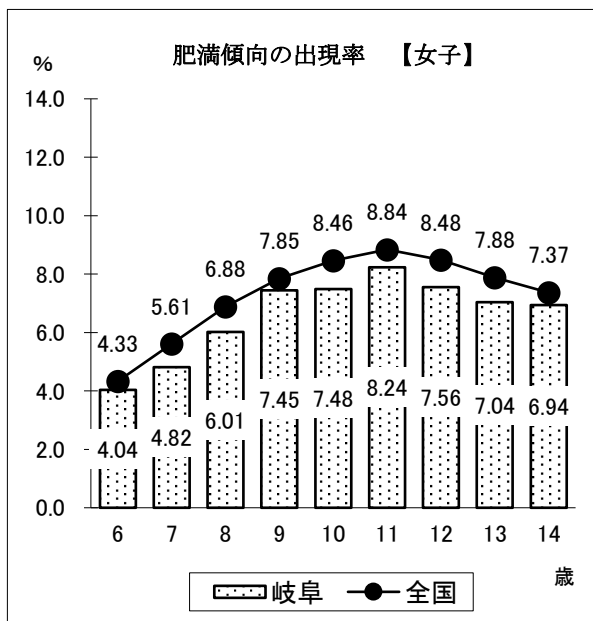


(14) 痩身傾向

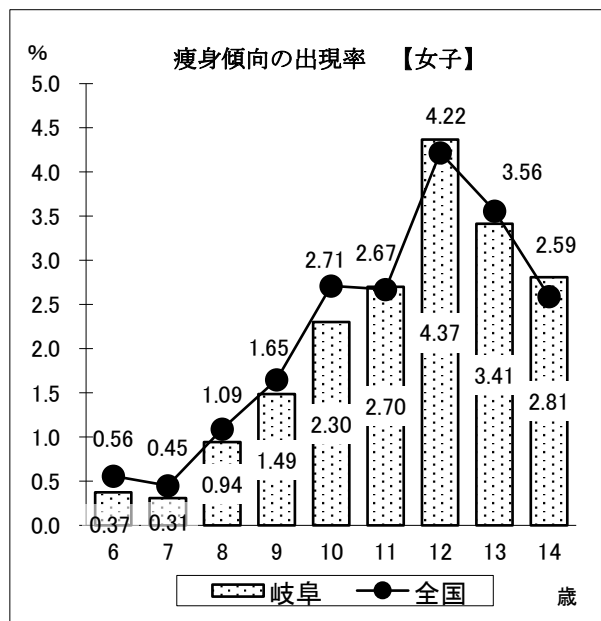
痩身傾向の出現率を全国と比較すると、男子の12～14歳で全国を上回った。



全国と比較すると、女子は全ての年齢で下回った。



全国と比較すると、女子は11歳、12歳、14歳で全国平均を上回った。



(15) 高等学校のBMI

BMI・・・成人の肥満並びに痩せの評価方法のひとつ
 $\text{体重kg} / (\text{身長m})^2$

高校生に対して、BMIを指標として肥満及び痩身傾向を算出している。男女ともに、BMI 18.5未満の割合が15歳に高い傾向がある。

